

「弟子の覚悟」

2023年06月01日

イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」（ルカ9：58）

イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。しかし、あなたは行って、神の国を告げ知らせなさい。」（ルカ9：60）

イエスはその人に、「鋤を手にかけてから、後ろを振り返る者は、神の国にふさわしくない」と言われた。（ルカ9：62）

主イエスの言葉と業には大きな力があり、民衆はその力に感嘆し、尊敬の思いを募らせていた。当然、主イエスに従いたいと願う人々がいた。その彼らに対し、弟子になるための覚悟を話されている。主イエスの宣教団が歩いていると、ある人が主イエスに、「あなたがお出でになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。彼もまた、主イエスの働きに感動し、共に歩みたいと、信従を申し出た。すると、主イエスは、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」と答えられた。狐や鳥は、休むべきねぐらがある。しかし、人の子（主イエス）には、枕で休息する所もない過酷な宣教の日々を送っている。あなたは、それほど厳しい宣教生活に耐えられないでしょうと、彼の申し出を断っている。主イエスは、彼が安易な気持ちで信従を申し出たことを見通されたのである。弟子たちは安住する地を持たず、旅人として生きるのである。寄る辺ない不安定な生活に耐える覚悟が必要であると諭されている。

主イエスは別のの人に、「私に従いなさい」と言われた。彼は弟子として、ふさわしい人間と思われたのであろう。彼は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。父を亡くし、葬式をしなければならぬ立場にあり、父の葬式を済ませてから、従うと答えている。すると、主イエスは、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。しかし、あなたは行って、神の国を告げ知らせなさい」と言われた。遺族が死者を葬ることは、どの国でも大切な務めとされている。イスラエルでは、族長アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの埋葬の記述から分かるように、死者の葬りは家族にとって何よりも優先される義務であった。ところが、主イエスは死者の葬りは死者に任せよと言われる。主イエスは地上に平和ではなく、剣をもたらすために来たと言われ、「人をその父に / 娘を母に / 嫁をしゅうとめに。こうして、家族の者が敵となる（マタイ10：35b～36）」と、家族に敵対しても、神の言葉に従うように諭している。死者の葬りより「神の国」を宣教することが、弟子の今の務めであると語っておられる。

また、別の人が「主よ、あなたに従います。しかし、まず私の家の者たちに別れを告げることを許してください」と申し出たところ、主イエスは、「鋤を手にかけてから、後ろを振り返る者は、神の国にふさわしくない」と言われた。エリヤは、エリシャが牛に鋤をつけて仕事をしている時、召し出したが、父母に別れの口づけをさせてくださいと頼むので、行ってきなさいと認めた。エリシャは、帰宅して、家族との別れの宴を催した後、エリヤに従っている（列王記上19章）。主イエスは「神の国」の宣教に向かう者は、エリヤより厳しく、過去を振り返るなどと言われる。これらの言葉は、社会に認知されていない初代教会のクリスチャンが経験した家族との別離を踏まえたものであろうが、家族を第一義とする者は弟子にふさわしくないと書かれている。今は、家族共々、弟子になる時である。